

1) 帝京大学医学部放射線科学講座

2) 帝京大学医学部附属病院帝京がんセンターがん放射線治療チーム

白石憲史郎^{1,2)}、熊谷 仁²⁾、上原隆三²⁾

ITEMの参加回数 20 回以上

今回の参加方法：現地参加

コロナ明けで復活した 現地参加型JRCと超満員のITEMに参加して

今年のキーワード

コロナ明け、医療AI、医療DX、知の融合

コロナ前とコロナ規制中、そして規制緩和後での学会開催の在り方の移り変わりについて

学会には、多くの参加者が一堂に会して情報を共有したり議論したりする場を提供するという学術上重要な目的があるため、本来は一定の規模以上の会場を確保し適切な時期に開催されるべきである。特に放射線医学は画像診断やがん治療、医用工学から医学物理学・生物学・基礎医学等内容が多岐に渡るため必然的に規模が大きくなり、お祭りのような要素を帯びていた感がある。機器搬送の問題からも会場は横浜に固定化しており、その形態については定型化されていたように思われる。

一方、3年前の新型コロナウイルス感染症蔓延による規制中は開催規模の縮小化とオンライン形式を駆使した参加形態の変容を余儀なくされ、臨場感の点で味気ない学会となった。しかしながら放射線医学は本質的にオンライン化対応能力に優れて

おり、他領域と比べて(がん治療を中心に考えたとき)学会運営上の影響は相対的に小さく、また我々は日常的にIT化・DX化に慣れ親しんでいる点からむしろそのポテンシャルを発揮する機会となった側面もある。

法律上の位置付けはともかく、本年は実質的にコロナ規制緩和後初の学会であったため、現地参加を待ちわびた多くの参加者が足を運んだ。ITEM展示場の3日間、合計入場者数は17,000人を上回り前年比1.5倍以上であり、土曜の午後の混雑には筆者も圧倒された。自身、久しぶりの活気に満ちたJRC参加に心躍るものがあり、立上げたばかりの新規リニアックHarmony®(Elekta)と周辺機器を中心に、知識を吸収するため訪れたパシフィコ横浜の流麗さに改めて感慨無量であった(図1)。

個人的には、昨年や一昨年に経験したような閑散とした学会には魅力を感じない。何しろ活発な議論等とは程遠い、一方通行の発表に終始しがちなプログラムが多くなると“論文を読むだけなら学会会場まで来る必要性は乏しい”的な印象が湧くし、教育的な緊張感も薄れてしまうからである。そして何より貴重な情報交換はやはり直接顔を合わせての方が効率的で、何をやるにも迅速化することを今回肌で感じた。もちろん学会=フェスティバルではなく、放射線医学に相応しい学会が学会らしくあるために「現地参加を前提としつつ、コロナ規制中の工夫を活かした発表者-聴講者双方向のバランスのとれた」形態が望ましい。既に多くの国際学会はその方向を模索しており、JRCの国際化促進の観点からも合理的な発展が期待される。

今回面白かった演題について

1. JSMP教育講演5「システム医薬の挑戦」

経験則ベースではなく、自然科学法則に基づく物理モデルや統計学的データ駆動モデルを組み合わせ、マルチスケールシミュレーションによる医薬システム開発。本学医療技術学研究科診療放射線学専攻の古徳純一教授が座長を担当した、東京大学大学院 工学系研究科化学システム工学専攻の杉山弘和教授のレクチャーである。iPS細胞の凍結モデルについて、分子→細胞→容器→フリーザー→社会レベルのシミュレーションを通して、費用対効果や細胞の生存率を最適化する方法が紹介された。さらに顕在化する社会医療費や少子高齢化、余剰医薬品、環境影



図1 パシフィコ横浜展示ホール